



Title	小島晋治著『太平天国革命の歴史と思想』
Author(s)	田中, 仁
Citation	史学研究. 1979, 144, p. 105-106
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76720
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

新刊紹介

小島晋治著『太平天国革命の歴史と思想』

田 中 仁

最近、日本における太平天国研究に関する二つの先駆的業績——野原四郎「太平天国の乱」(一九三四年)・増井経夫「太平天国」(一九五一年)——が相次いで復刊された(歴史科学協議会編『歴史科学大系13』『アジアの変革(上)』、校倉書房、一九七八年刊、増井著『中国の二つの悲劇——アヘン戦争と太平天国』、研文出版、一九七八年刊、にそれぞれ収録)。引続いて、この分野における第一人者である著者の四半世紀に亙る研究の集大成として、本書が刊行された。

本書は、著者が一九五九年から一九七八年にかけて発表した諸論稿と、新たに書下した二つの小篇より成っている。書下しの二篇(第二部第四章「太平天国運動の歴史的性格」の(二)・第三部「中国における太平天国研究の動向」の(下)「楊秀清評価をめぐって」の内容は次の通りである。すなわち前者においては、孫文の太平天国評価より始まり、紅軍が太平天国軍の経験を吸収したことが述べられ、更に両軍の共通点・相違点についての分析が行われる。後者においては、従来紹介されることのなかった楊秀清評価の展開

が文革以前・文革期・四人組追放後の三期に分けて概観される。それは、「今の政治上の諸問題をかなりストリートに過去の歴史解釈にもちこむ」(三一九〜二〇頁)こともあるという「自から作りあげた歴史の連続性の感覚が身についている中国のようなところでのみ生れる歴史意識」(三二〇頁)の表象としての歴史人物評価の一例であるが、著者が蔡少卿「楊秀清評価についてのいくつかの問題」(『南京大学学報』一九七七年第四期所収)の分析を通じて、現在、文革期の「主観主義的、恣意的な歴史解釈におちこみがちだった傾向」を克服し、「歴史の真実に迫ろうとする機運」が「たかまりつつある」と述べている(三四三頁)ことは、様々な意味で示唆的である。

本書は、第一部・農民革命の思想、第二部・太平天国史の諸問題、第三部・近代農民運動史研究の視点と方法、という三つの部分によって構成されている。第一部に収められた二つの論文(第一章「農民戦争における宗教——結社宗教——」、第二章「拝上帝教と拝上帝会の特質」)では、いずれも農民闘争における宗教の役割——より具体的には太平天国における拝上帝教の役割——が考察される。第二部は独立した五つの部分を有している。以下その標題を記す。第一章「十九世紀中葉における農民闘争と太平天国」、第二章「マルクスの『太平天国』論」、第三章「『李秀成親供手跡』考」、第四章「太平天国運動の歴史的性格」、第五章「幕末日本と太平天国——水戸藩のある庄屋の『見聞録』の記事にふれて——」。内容・分量とも様々ではあるが、太平天国に対して違った角度からアプローチが為されている。

る。第三部は、研究動向・書評を中心に五つの小篇を含んでいる。

鳥瞰的に本書をみると、それは太平天国に関する多面的かつ立体的なイメージを提供している。マルクスにおける一八五〇年から一八六二年への中国社会認識の後退を論じた「マルクスの『太平天国』論」、アヘン戦争後の中国の動向との連関において明治維新の政治主体の思想形成の問題を論じた「幕末日本と太平天国」は、太平天国史の周辺の知識を与えてくれる。『李秀成親供手跡』考」では、李秀成と曾国藩をとりまく様々な政治過程の中で、李の逮捕・供述書の作成・処刑・供述書の改竄とその刊行に至る過程が生生きと描きだされていて面白い。また、研究動向・書評には、有益な学説上の整理・貴重な指摘が多く含まれている。

大部分が既に発表されたものであることは前記した通りであるが、本書の刊行によって、著者の太平天国研究を体系的に理解することが容易になった。著者は、農民闘争における宗教の役割、及び太平天国と農民との連関にその研究上の力点を置いている様に思われる。前者の観点に関して著者は、中国革命の変革主体として、対自的階級としてのプロレタリアートが出現する以前の歴史段階において、権力のトータルな否定を教義の中に潜在的に内包し、加えて禁欲倫理に裏づけられた戦闘性を有する結社宗教を重視する。しかしながらそれらにおいても、農民の利害がカリスマ的な受命者を介して間接的にしか表現され得なかった所に限界が存在したとする。後者については、アヘン戦争後の農民の諸闘争が、太平天国闘争の全国的発展の為の客観的な要因であり、加えて両者の闘争の間に

は、客観的にみて有機的連繫が存在したこと、更に、その社会的基盤において太平天国と洋務派とは全く相違していると論ずる。

これらの諸研究をもとに、著者は太平天国に対して、次の様な基本的評価を付与する。すなわち、太平天国は「最も高度に発展した農民戦争」（五二頁）であり、「全領域の変革をめざし、かつそのための統一的な組織、軍隊、政権を創造した一つの全体的な革命」（二七一頁）であっただけでなく、「反帝国主義、反封建主義の目標を先駆的に提示した」（同前頁）。そして「湘軍が郷紳・地主の反革命軍であった」のに対して「太平軍が農民および都市無産者の革命軍であった」（一三七頁）。更に著者は、「もし太平天国が勝利したならば（中略）一定の『民富』の形成が可能となり」、従来の窮迫的な「商品生産が、小ブルジョア的な商品生産として展開していく途が開かれたのではなかったか」（一四六頁）と推測している。著者のこの極めて積極的な評価は、太平天国に前後する諸々の歴史過程との関連において、若干の問題点を有するかもしれない。

* * *

尚付言すると、同氏は本書と相前後して、『アジアからみた近代日本』（亜紀書房、一九七八年一月）を発表した。この中には、前記「幕末日本と太平天国」とほぼ同じ観点によって書かれた「太平天国と日本」なる小篇が収められていて参考になる。

（一九七八年一月刊、研文出版、四〇四頁、六、五〇〇円）